

あたりを朐みまわすと真暗まっくらで、遠くの方で、ほう、ほうツて、呼ぶのは何だろう。冴えた通る声で野末のずえを押ひろげるように、鳴く、トントントントンと餌くだまにあたるような響きが遠くから来るように聞える鳥の声は、梟ふくろうであった。

一ツでない。

二ツも三ツも。私に何を談はなすのだろう、私に何を話すのだろう。鳥がものをいうと慄ぞ然っとして身の毛が弥立よだった。

ほんとうにその晩ほど恐かったことはない。

蛙かわずの音がますます高くなる、これはまた仰山ぎょうさんな、何百、何どうして幾千と居て鳴いてるので、幾千の蛙が一ツ一ツ眼があつて、口があつて、足があつて、身体からだがあつて、水中に居て、そして声を出すのだ。一ツ一ツ、トわなないた。寒くなった。風が少し出て、樹がゆっさり動いた。

蛙の音がますます高くなる。居ても立っても居られなくツて、そつと動き出した。身体が何うにかなつてるようで、すつと立ち切れないで踞つくばった、裙すそが足にくるまつて、帯が少し弛ゆるんで、胸があいて、うつむいたまま天窓あたまがすわった。ものがぼんやり見える。

見えるのは眼だトまたふるえた。

ふるえながら、そつと、大事に、内証ないしょうで、手首をすくめて、自分の身体を見ようと思つて、左右へ袖をひらいた時、もう、思わずキャツと叫んだ。だって私が鳥のように見えただんですもの。何んなに恐かつたらう。

この時、背後うしろから母様がしつかり抱いて下さらなかつたら、私どうしたんだか知れませんが、それはおそくなつたから見に来て下すつたんで、泣くことさえ出来なかつたのが、

「母様おつかさん！」といつて離れまいと思つて、しつかり、しつかり、しつかり襟えりん処とこへかじりついて仰向あおむいてお顔を見た時、フット気が着いた。

何うもそうらしい、翼はねの生えたうつくしい人は何うも母様であるらしい。